



第13回 政治家と科学者の対話の会 (結果概要)

政策共創推進委員会 委員長 永野 博 / HIROSHI NAGANO

日時：2026年6月30日(火) 15時00分～16時40分

場所：衆議院第二議員会館 多目的会議室

話題：(研究) 倫理教育を幼児段階から初等中等高等教育の各段階で接続、展開するための提言案の作成

参加者：57名(議員11名[過去最多]、EAJ会員等議員以外46名)

議員：大野敬太郎議員(衆・自民)、伊佐進一議員(衆・中道)、大串正樹議員(衆・自民)、
小林史明議員(衆・自民)、平林晃議員(衆・中道)、三浦信祐議員(参・公明)、
赤松健議員(参・自民)、山本左近議員(衆・自民)、浅野哲議員(衆・国民)、
井原隆議員(衆・自民)[今回初参加]、河合道雄議員(衆・みらい)[今回初参加]

話題提供者：小泉英明 EAJ顧問・工学倫理と工学教育プロジェクト委員長、
長井委員(公正研究推進協会)、池田委員(日本技術士会)

EAJ政策共創推進委員会：永野委員長、長井副委員長、岸本委員、大倉委員、庄司委員 他

EAJ政策共創プラットフォーム：高木委員長、池田委員、椿委員、北澤委員 他

EAJ：安西会長、五十嵐副会長、菱田顧問、平澤会員 他 正会員、客員会員、賛助会員(3社)
国会事務局、国立国会図書館、メディア関係者 等

概要：

「研究倫理教育を幼児期から高等教育まで一貫して展開するための提言(案)」を中心に議論が行われた。

伊佐議員は開会挨拶で、日本の研究環境に対する危機感と将来への希望について述べた。危機感として、日本では研究費の獲得や運用が困難である一方、米国MITでは研究資金が比較的容易に集まるという研究環境の違いを紹介した。他方、希望として、漫画『ドクターストーン』が科学を題材に子どもたちの探究心を刺激していることを挙げ、日本の子どもたちの科学への関心には大きな可能性があるとの認識を示した。

大野議員は、アカデミアと政治が政策形成の初期段階から連携することの重要性を強調した。米国では政策立案の段階から研究者、産業界、政府が戦略や役割分担について十分に調整した上で研究公募が行われる一方、日本ではそ



挨拶される伊佐議員(左)と大野議員(右)

のような調整が行われていないと指摘した。その上で、前提条件や制約条件を共有しながら意思決定を進めることで、より効果的な科学技術政策が実現できるとの考えを示した。

初参加となる河合議員は、父親が研究者であったことから科学技術政策への関心を紹介するとともに、AI・デジタル技術を活用した未来志向の政策形成に取り組む意欲を表明した。

小泉EAJ顧問は、「人新世における新たな倫理と教育—AIと人間の本質的な違いを前提として—」と題して説明を行った。人類は地球の極めて薄い環境層の中で生活しており、さらに2020年には人工物の総重量が全生物の総重量を上回ったことから、人間中心の従来の倫理ではなく、自然環境や未来世代を含めた普遍的な倫理が求められると指摘した。また、生物とAIでは情報処理速度に本質的な違いがあることを示し、人新世の到来を踏まえ、人間中心の従来の倫理から、自然環境や未来世代を含めた普遍的倫理への転換が必要であると指摘し、新たな倫理教育の必要性を論じた。

また、コロナ禍における日本の死亡率が欧米諸国に比べて低かった背景として、日本人の「プロソーシャリティ（高社会能力）」を紹介した。法的強制ではなく、自発的にマスク着用や三密回避を実践した利他的行動が社会全体の感染抑制につながったとの海外研究を紹介し、このような倫理観や社会性は今後の教育において重視すべき資質であると述べた。

長井委員（公正研究推進協会）は、研究者による研究者のための研究倫理教育を推進する活動を紹介し、中等教育向け教材や研究倫理教育プログラムの整備状況を報告した。

池田委員（日本技術士会）は、技術士倫理の変遷と倫理綱領の変遷を説明するとともに、国際的にも「持続可能性」「ダイバーシティ」「倫理」が技術者に求められる基本要件となっていることを紹介した。

討議では、人材育成のあり方について活発な意見交換が行われた。

小林議員は、2040年に向けてホワイトカラー人材の余剰と理工系人材不足が予測される中、AI時代には知識・技能だけでなく倫理観やリーダーシップの育成が重要になると指摘した。

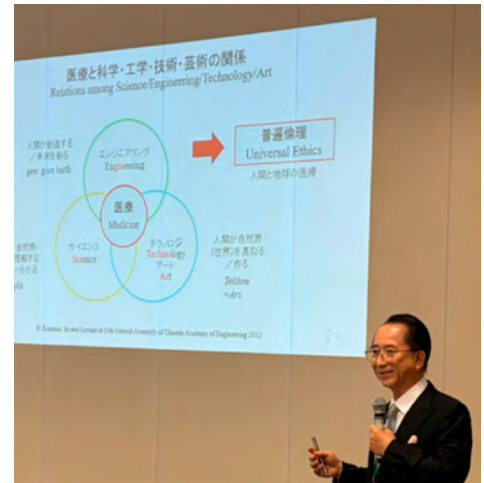
大野議員は、昨年の第7期科学技術・イノベーション基本計画に向けた検討の中で、第6期の目玉であった文理融合政策が進展しなかったことも踏まえ、今回は具体的な人材戦略へ落とし込む必要があると述べた。

平林議員は、不登校の増加を踏まえ、子どもの意欲を引き出す教育の重要性を提起した。小泉顧問は、日本の子どもはOECD・PISA調査で科学への興味・関心が極めて低いことを紹介し、学力以上に学ぶ意欲の低下が深刻な課題であると指摘した。

山本議員は、体験格差とSTEAM教育について質問した。これに対し小泉顧問は、STEAM教育は重要であるものの、世界では既にその先の議論が始まっていると説明した。また、身体性や実体験を伴う学びが創造性や人間形成に不可欠であり、ICT教育のみでは十分ではないとの考えを示した。

初参加となる井原議員は、理工系離れの背景には研究者・技術者への憧れの不足があるとして、社会的評価や大学教育の見直しを提案した。

河合議員は、SEL（ソーシャル・エモーショナル・ラーニング）や「センス・オブ・ワンダー」を教育に取り入れ、AI時代にふさわしい倫理教育のあり方について問題提起した。



説明される小泉顧問

これに対し、安西EAJ会長は、AI for Science や、創薬・材料開発などでは実験との統合が不可欠であることの現状を説明するとともに、AI倫理では日本とEUが協調し、米中とは異なる第三極として国際的なルール形成を主導する可能性に言及した。

大串議員は、AIが示す「正解」と人間が探究する「真理」との違いに着目し、AI利用に伴う認識論・研究倫理上の課題を提起した。

浅野議員は、研究力向上には倫理教育だけでなく、科学者・技術者が自己理解やメタ認知能力、自信と主体性を育む教育も不可欠であると述べた。

赤松議員は、技術士制度の歴史について質問し、長井委員から、その源流が工部大学校や日本工学会の精神にあることが紹介された。

三浦議員は、幼児教育における豊かな体験の重要性を自身の経験を交えて説明し、「生き抜く力」と体系的な学びの両立が重要であると述べた。

最後に、小泉顧問は、他者との共存を重視する東洋思想や日本人のプロソーシャリティはAI時代において国際的な価値を持つと強調した。また、イノベーションの源泉は知識だけでなく情熱や創造性にあり、科学技術の発展には芸術教育を含めた豊かな人間教育が不可欠であると述べ、幼児期から一貫した倫理教育の重要性を改めて訴えた。

【参考】議員とEAJ会員が共有した考えのポイント（案）

1. 幼児期から高等教育まで一貫した研究倫理教育の必要性

研究倫理は研究者だけが学ぶものではなく、幼児期から高等教育まで発達段階に応じて継続的に育むべきものであり、知識だけでなく倫理観や社会性を養う教育として体系化することの重要性が共有された。

2. AI時代・人新世に対応した新たな倫理観の構築

AIの急速な発展や人新世における社会環境の変化を踏まえ、人間中心の従来の倫理に加え、自然環境や未来世代との共生を視野に入れた普遍的な倫理観を育成する必要性が示された。

3. 科学への興味・探究心を育む教育と体験の重要性

子どもたちの科学への興味や探究心を育てるためには、知識の習得だけでなく、身体性や実体験、芸術性、「センス・オブ・ワンダー」を重視した教育が重要であり、学ぶ意欲そのものを育むことが必要との認識が共有された。

4. AI時代に求められる人材育成の方向性

AIの普及が進む中では、専門知識や技能に加え、倫理観、リーダーシップ、自己理解、創造性など、人間ならではの能力を育成することが今後の人材戦略の中核となるとの考えが示された。

5. 研究倫理・技術者倫理の社会全体への定着

研究者や技術者の倫理は研究現場だけの課題ではなく、中等教育を含めた教育や専門職育成を通じて社会全体に浸透させることが重要であり、研究者・技術者自らが主体的に倫理文化を形成していくことの意義が確認された。

6. 日本社会が有する「プロソーシャリティ」の価値

日本人の利他的・協調的な行動様式（プロソーシャリティ）は、AI時代や国際社会においても重要な資質となり得るものであり、科学技術の発展と倫理を両立させる日本の強みとして評価された。

7. 政治とアカデミアの継続的な対話の重要性

研究環境の改善、人材育成、倫理教育などの課題に対応するためには、政策形成の初期段階から政治とアカデミアが前提条件や制約条件を共有しながら継続的に対話し、具体的な政策へ反映していくことの重要性が改めて確認された。



会議場全体

NEWS

EAJプロジェクト「社会、産業、人々の生活の変容を支える電力システムの在り方」(略称：EAJ電力プロジェクト) 報告シンポジウム／ESI第27回シンポジウム報告

電力プロジェクト プロジェクトリーダー 荻本 和彦 / KAZUHIKO OGIMOTO

2026年9月8日（火）に東京大学 駒場リサーチキャンパス An棟 コンベンションホールで、EAJプロジェクト「社会、産業、人々の生活の変容を支える電力システムの在り方」(略称：EAJ電力プロジェクト) 報告シンポジウム／ESI第27回シンポジウムが開催された。会場参加者は約80名、オンライン参加者は約230名であった。

本シンポジウムは、新たなニーズに応える電力・エネルギー・社会システムへの提言—変革のポテンシャルを考える—と題し、2年半に及ぶプロジェクトの活動成果と6つの提言に関する報告会として開催された。6つの提言を起点に、電力分野の内側から課題を掘り下げるとともに、異分野との接点から新たな変革の可能性を探るシンポジウムとなった。

シンポジウムは城石 芳博EAJ顧問の司会で、東京大学生産技術研究所 特任教授 荻本 和彦プロジェクトリーダー、JST名誉理事長 中村 道治EAJ顧問、の開会挨拶につづき、講演の部として、荻本 和彦プロジェクトリーダーから、プロジェクトの活動経緯、報告書案の全体説明が行わ



シンポジウム会場の様子

れ、続いて、6つの提言についてそれぞれの専門家から論点や今後の課題が紹介された。まず、荻本 和彦プロジェクトリーダーから「プロジェクトの実施と提言」と題してプロジェクト全体の活動経緯、報告書案、提言案についての説明があった。続いて、「提言1(集中／分散の協調)に関する議論」と題して東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授 馬場 旬平氏から、「提言2(制度)に関する議論」と題して東京電力ホールディングス株式会社 経営技術戦略研究所 経営戦略調査室 チーフエコノミスト 戸田 直樹氏から、「提言3(電力×〇〇と指標体系)」と題して東京大学 大学院工学系研究科 教授 小宮山 涼一氏から、「提言4(意思決定)に関する議論」と題して東京大学未来ビジョン研究センター 教授 杉山 昌広氏から、「提言5(人材育成)に関する議論」と題して関西電力株式会社イノベーション推進本部副本部長 山本 敏之氏から、「提言6(知識基盤)に関する議論」と題して大阪大学 大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 准教授 芳澤 信哉氏から、それぞれ提言に関する論点などが紹介された。

後半のパネルディスカッションの部では、まず、東京大学生産技術研究所 教授 岩船 由美子氏、早稲田大学 スマート社会技術融合研究機構 上級研究員(研究院教授) 石井 英雄氏、株式会社日立パワーソリューションズ 技師 紺谷 怜央氏、株式会社Loop 戦略本部GX推進部 部長 渡邊 裕美子氏、富山大学 工学部 北陸電力共研講座 客員教授 井上 俊雄氏、岐阜大学 地方創生エネルギーシステム研究センター 特任教授 浅野 浩志氏、東京電力ホールディングス株式会社 上席フェロー、東京大学GX戦略推進センター客員教授 岡本 浩氏(オンライン)をパネリストとするパネルディスカッション1「変革のポテンシャルを探る—電力の視点—」が行われた。パネルディスカッションは、公益財団法人東電記念財団 常務理事 蘆立 修一プロジェクト顧問および荻本 和彦プロジェクトリーダーをモデレーターとして、電力技術・システムの研究・技術・事業に携わってこられた専門家の視点から、変革のポテンシャルについて1時間、幅広く、また掘り下げて議論された。

続いて、福島国際研究教育機構(F-REI) 理事 江村 克己会員をモデレーターとして、パネルディスカッション2「変革のポテンシャルを探る—電力×〇〇の視点—」が行われた。パネリストは、東京大学 特別教授 合原 一幸氏、東北大学 材料科学高等研究所 教授 安東 弘泰氏、日本工学会会長、元東芝 副社長 須藤 亮氏、株式会社ビットメディア 代表取締役社長／株式会社MESH-X 代表取締役 高野 雅晴氏、東京大学生産技術研究所 特任教授 荻本 和彦氏で、電力分野に加えて、異なる分野の有識者の皆様にもご登壇いただいた。

いずれのパネルディスカッションにおいても、パネリスト間の自由闊達な議論や、会場からのQ&Aも含め、プロジェクト成果の社会実装や今後の展開に向けた活発な意見交換が行われた。最後に東京大学名誉教授 横山 明彦プロジェクト顧問からの閉会挨拶があり、活発で実り多い議論のうちに閉会となった。シンポジウム後のアンケートでも、多くの参加者から、幅広い課題を統合設計の視点から整理した多面的な提言、電力分野以外の登壇者を交えたパネル討論が有益、など前向きな回答が寄せられた。今回のアンケート結果などをもとに、報告書などのブラッシュアップを図る。

シンポジウム閉会後に意見交換会が東京大学 駒場リサーチキャンパス An棟 1階レストラン「ape アーペ」で開催され、61名の参加者が議論を深めた。

プログラム

12:50	開場		
(開会挨拶)			
13:00～13:10	開会挨拶1	プロジェクトリーダー、東京大学生産技術研究所 特任教授	荻本 和彦
	開会挨拶2	JST 名誉理事長、EAJ 顧問	中村 道治
(講演)			
13:10～13:40	「プロジェクトの実施と提言」 プロジェクトリーダー、東京大学生産技術研究所 特任教授		荻本 和彦
13:40～13:55	提言1 (集中/分散の協調) に関する議論 東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授		馬場 旬平
13:55～14:10	提言2 (制度) に関する議論 東京電力HD(株) 経営技術戦略研究所 経営戦略調査室 チーフエコノミスト		戸田 直樹
14:10～14:25	提言3 (電力×〇〇と指標体系) に関する議論 東京大学 大学院工学系研究科 教授		小宮山 涼一
14:25～14:40	提言4 (意思決定) に関する議論 東京大学 未来ビジョン研究センター 教授		杉山 昌広
14:40～14:55	提言5 (人材育成) に関する議論 関西電力(株) イノベーション推進本部 副本部長		山本 敏之
14:55～15:10	提言6 (知識基盤) に関する議論 大阪大学大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻 准教授		芳澤 信哉
15:10～15:20	(休 憩)		
(パネルディスカッション)			
15:20～16:20	パネルディスカッション1「変革のポテンシャルを探る—電力の視点—」 パネリスト 東京大学生産技術研究所 教授 早稲田大学 スマート社会技術融合研究機構上級研究員 (研究院教授) (株)日立パワーソリューションズ 技師 (株)Loop 戦略本部GX推進部 部長 富山大学 工学部 北陸電力共研講座 客員教授 岐阜大学 地方創生エネルギーシステム研究センター 特任教授 東京電力HD(株) 上席フェロー、東京大学GX戦略推進センター客員教授 岡本 浩 (オンライン) モデレーター 公益財団法人東電記念財団 常務理事 東京大学生産技術研究所 特任教授		岩船 由美子 石井 英雄 紺谷 怜央 渡邊 裕美子 井上 俊雄 浅野 浩志 岡本 浩 (オンライン) 蘆立 修一 荻本 和彦
16:20～16:30	(休 憩)		
16:30～17:30	パネルディスカッション2「変革のポテンシャルを探る—電力×〇〇の視点」 パネリスト 東京大学 特別教授 東北大学 材料科学高等研究所 教授 日本工学会会長、元東芝 副社長 (株)ビットメディア 代表取締役社長／(株)MESH-X 代表取締役 東京大学生産技術研究所 特任教授 モデレーター 福島国際研究教育機構 (F-REI) 理事		合原 一幸 安東 弘泰 須藤 亮 高野 雅晴 荻本 和彦 江村 克己
17:30	閉会挨拶	プロジェクト顧問、東京大学 名誉教授	横山 明彦
17:40～19:30	意見交換会 An棟 1階レストラン「ape アーペ」		

EAJ プロジェクト「社会、産業、人々の生活の変容を支える電力システムの在り方」 (略称：EAJ 電力プロジェクト) 報告シンポジウム／ESI 第 27 回シンポジウム登壇者



司会 城石芳博
EAJ 顧問



開会挨拶 1 荻本和彦
プロジェクトリーダー、
東京大学生産研 特任教授



開会挨拶 2 中村道治
JST 名誉理事長
EAJ 顧問



講演「プロジェクトの実
施と提言」 荻本和彦
プロジェクトリーダー、
東京大学生産研 特任教授



提言 1 馬場旬平
東京大学 大学院
新領域創成科学研究科
教授



提言 2 戸田直樹
東京電力HD ㈱ 経営技術
戦略研究所経営戦略調査室
チーフエコノミスト



提言 3 小宮山涼一
東京大学 大学院
工学系研究科 教授



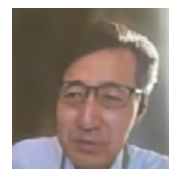
提言 4 杉山昌広
東京大学 未来ビジョン
研究センター 教授



提言 5 山本敏之
関西電力株式会社
イノベーション推進本部
副本部長



提言 6 芳澤信哉
大阪大学大学院工学
研究科 環境エネル
ギー工学専攻 准教授



パネルディスカッション 1 「変革のポテンシャルを探る—電力の視点—」

左からモデレーター：荻本和彦氏、蘆立修一氏、パネリスト：岩船由美子氏、石井英雄氏、紺谷怜央氏、渡邊裕美子氏、井上俊雄氏、浅野浩志氏、岡本浩氏（オンライン）



パネルディスカッション 2 「変革のポテンシャルを探る—電力×〇〇の視点—」

左からモデレーター：江村克己氏、パネリスト：合原一幸氏、安東弘泰氏、須藤亮氏、高野雅晴氏、荻本和彦氏

閉会挨拶 横山明彦氏
プロジェクト顧問
東京大学 名誉教授

1. シンポジウム／円卓会議概要

第29回EA-RTMは7月23日（木）にNAEK主催により、“Physical AI and Sustainability”のテーマで開催された。韓国側では当初は済州島での開催を想定して準備を進めていたが、宿泊場所等の問題もあり、ソウル市内での開催場所は、江南地区にあるEL TOWERに落ち着いた。EAJ、CAEともに対面での参加となり、前回の韓国開催以来3年ぶりの完全対面による開催となった。

同日9:30~14:40のシンポジウムの部では例年通り、NAEK、CAE、EAJの順で開催挨拶が行われ、続いて3つのセッションでの各アカデミーからの話題提供とディスカッションが行われた。休憩を挟んで15:30~16:55には円卓会議が開催され、各アカデミーの活動報告、NAEK担当の技術協力に関するアンケート調査結果の報告、CAEによる第30回東アジア3か国工学アカデミーシンポジウム／円卓会議の開催提案と進み、閉会した。同日夕の公式ディナー、翌7月24日（金）午前中のLGサイエンスパークの見学会と予定通りに全日程を消化し、閉幕した。

2. シンポジウムにおける講演内容について

2-1. Opening Remarks

シンポジウムにおいては、3アカデミーの代表による開会挨拶があり、主催のNAEKからは国際委員会（International Relations Committee）の委員長のJae-Woo Park教授、CAEからは副委員長のNing Ding博士、EAJからは原山優子荣誉フェローがそれぞれ開会に際しての挨拶を行った。原山フェローからの挨拶（図1）では、今回のテーマであるPhysical AIという分野が人間との協調、共同作業などを通じて、実社会への影響が極めて大きい重要な分野であることに触れたものであった。



図1 原山荣誉フェローによる Opening Remark

2-2. 第1セッション：Physical AI in Next-Generation Industrial Systems

技術シンポジウムの第1セッションでは、NAEKからはKAISTのYoung-Jae Jang教授が“Physical AI for Manufacturing”というタイトルでKAISTが開発したKAIROと名付けられたPhysical AIプラットフォームとそのうえで動作する各種のAI製造システムの実証プロジェクトについて説明があった。少し前Industry 4.0として注目された生産システムの次世代としてAI Manufacturingを位置づけ、力をいれて実証システムの構築を行っている旨、説明があった。

CAEからは香港大学のZuojun Shen教授から“Logical AI: Bridging Language Model and Physical Reality”と題して、大規模言語モデルに基づくLogical AIとPhysical AIのギャップを埋める試み、その考え方を交通システムやドラッグデリバリーなどの分野に適用した例について説明があった。

EAJからは筆者（秋田大学三島）が“Physical AI × Next Generation Venous Industries”と題して、廃棄物処理、リサイクルなどの静脈産業にAI技術を導入した実例としてAI応用による材料ソーティングシステムなどの実例と、静脈産業に導入するための基礎技術としてのリサイクル材料判別などの研究例を紹介した。

2-3. 第2セッション:Green Innovation for Sustainable Manufacturing

第2セッションでは、CAEからNortheastern UniversityのLixin Tang教授が“Data Analytics and Optimization for Manufacture-Circulation Industrial System”と題して、鉄鋼生産をケーススタディとして強化学習を用いたプロセスの最適化、低環境負荷化の試みについて説明があった。

EAJからはNEDOフェローの矢部彰博士より、“Necessity of Innovative Technologies for Realizing Sustainability and Carbon Neutrality”と題して日本における俯瞰的なデータに基づき、カーボンニュートラルに向けてエネルギー源を水素、アンモニア、バイオガスに転換してゆく将来像が示された。交通システムに関しては電気自動車、燃料電池車など、さらには船舶、航空機なども含めてエネルギー源の転換の必要性が言及された。2050年までに見通した技術導入のコストが示されるとともに、あらゆる技術を総動員してカーボンニュートラルを達成するためのロードマップが示された。(図2)



図2 講演後のディスカッションに臨む矢部フェロー

第2セッションの最後にはNAEKからKISTのSanghyup Lee博士が“C-Physical AI and Ko-Chi-Ja Sustainability”とのタイトルで講演が行われた。東アジア3カ国のGDPの合計が世界の22%を超えること、温暖化ガス排出量の合計が30%を超えることから説き起こし、Ko(rea)、Chi(na)、Ja(pan)の東アジアの3か国が排出削減のための協調的プラットフォームを構築することの必要性と有効性について説明があった。

2-4. 第3セッション:Policy, Regulation, and International Collaboration for Future Industrial Systems

昼食休憩を挟んだ第3セッションでは先ずEAJから再び原山栄誉フェローが登壇し、“Policy, Regulation, and International Collaboration for Future Industrial Systems with AI-A Japanese Perspective”と題して講演を行った。講演の中では、日本の技術の質をもった信頼性の高いAI技術の導入を通じて、“世界でも最もAIフレンドリーな社会”をめざすことが述べられた。(図3)

セッションの2番目としてNAEKからソウル国立大学のYoung Lim教授が登壇し、“Platform Evaluation and Competition Policy-Lessons for Northeast Asia”と題する講演を行った。講演では1995年のWindows95の発表から、IT分野ではプレーヤーが交代しつつ、市場の寡占が繰り返されてきたことを説明したうえで、破壊的な技術革新を妨げない形での基準や規制の検討が望まれるとの内容であった。



図3 第3セッションにおけるディスカッションの様子

シンポジウムの最後として、CAEからBeihang UniversityのFei Tao教授が、“Digital Twin: From Theory to Practice”のタイトルで講演を行った。現在の生産システム研究が、Digital Twinの研究に基づく知見が実装段階であることを説明し、関連した取り組みについて紹介があった。

3. 円卓会議について

シンポジウム終了後、40分程度の休憩をはさみ、東アジア3カ国工学アカデミーの円卓会議が催された。冒頭にNAEKの国際委員長Jae-Woo Park教授が開会の挨拶を行い、引き続き3アカデミーそれぞれがこ

の1年間の変化を中心に活動報告を行った。NAEKはJae-Woo Park教授、CAEは副委員長のNing Ding博士が、EAJは三島教授が説明を行った。次に、今回の技術協力調査の担当のNAEKからJae-Woo Park教授が調査結果の説明を行った。議題の最後に次年度の担当アカデミーであるCAEより次回のEA-RTMについての提案があった。中心トピックを“AI for Engineering”とし、例年通りの開催時期である10月～11月に、杭州にて開催する旨の提案であった。円卓会議の最後にはEAJの原山荣誉フェローがAI分野において3アカデミーが学生交流やジョイントステートメントの発出などの実質的な協力を進めて行く必要がある旨コメントし、第29回の東アジア3アカデミー円卓会議は閉幕した。同日夕刻にはNAEKの主催による公式ディナーが催された。

4. 見学会について

翌7月24日のLGサイエンスパークの見学会は、当初予定されていた午後では無く、午前中に実施された。EAJからは矢部NEDOフェローと三島が参加し、CAEからの参加者とともに、バスでセンターに向かった。

サイエンスパークの見学においては会議室に通された後、Executive Vice PresidentのByoung-Hoon Kim博士から歓迎の挨拶があった。引き続き、Research Fellow/AI Algorithm TPのリーダーであるHyejeoung Jeon博士よりAIに関連した研究開発の取り組みについて説明があった。そのまま博士よりパーク内の見学案内が行われた。Energyゾーン、生活ゾーン、Mobilityゾーン、Bioゾーンと順次見学に回った。エネルギー貯蔵、エネルギー利用の効率化から、AI応用によるQOLの向上、創薬など多岐にわたる研究開発の内容を一気に回る濃密な見学会であった。最後に役員フロアにて昼食会を経て見学会は終了した。



図4 LGサイエンスパーク全景

5. まとめと雑感

今回のシンポジウム／円卓会議のトピックであるPhysical AI and Sustainabilityは主催のNEAKの提案に基づくが、日本としても歓迎すべきテーマであった。産業用ロボット技術の実用化技術に関して多くの蓄積がある日本は、生成AIにおいて遅れをとっている状況をキャッチアップする鍵はPhysical AIであると考えられているからである。その戦略を否定するつもりは無いが、状況は楽観できないことが明らかになったと考えている。報道等でも知られているように、中国におけるロボット技術、特に人型ロボットの技術進展は急速であり、Physical AI分野においても研究開発の速度は相当に早いことが見て取れた。また韓国においても生産システム分野を中心としてPhysical AI技術の社会実装に注力している。東アジアにおいても、日本が単純にキャッチアップされる立場では無い事は認識する必要がある。

また、毎回のことではあるが、EA-RTMに対する取り組みそのものにも温度差がある。主催のNAEKは別として、CAEからの訪問団は講演者を含めて7、8人を数えたのに対し、EAJからののは講演者をかねた3人のみであった。上記のように、日中韓の3カ国の中で日本が技術的アドバンテージを有している分野が全てではない。技術をキャッチアップするとともに、協調、連携を通じてWin-Winの関係を築くためにもEA-RTMの重要性は増していると考えている。EAJの対応も可能な限り強化して行く必要があるだろう。

シンポジウム／円卓会議・テクニカルツアー プログラム

開催場所：EL TOWER, 213 Gangnam-daero, Seocho District, Seoul／LG Science Park (Magok)

開催日時：2026年7月23日（木）シンポジウム・円卓会議／7月24日（金）テクニカルツアー

International Symposium on Physical AI and Sustainability July 23rd, 2026(9:30~14:40)

Opening Session

Opening remarks 1	Prof. Jae-Woo Park, Chair, International Relations Committee, NAEK
Opening remarks 2	Dr. Ning Ding, Deputy Director General, CAE
Opening remarks 3	Prof. Yuko Harayama, Advisor and Distinguished Fellow, EAJ

Session 1: Physical AI in Next-Generation Industrial Systems

Moderator	Prof. Sung-Hoon Ahn, Department Chair, Department of Mechanical Engineering, Seoul National University, NAEK Member
Speaker 1 (NAEK)	Prof. Young-Jae Jang, Department of Industrial & Systems Engineering, KAIST
Speaker 2 (CAE)	Prof. Zuojun Shen, Dean of the Graduate School and Director of the Institute of Supply Chain Innovation, The University of Hong Kong, CAE International Member
Speaker 3 (EAJ)	Prof. Nozomu Mishima, Akita University Graduate School of Engineering Science, EAJ Fellow

Session 2: Green Innovation for Sustainable Manufacturing

Moderator	Prof. Jai-ick Yoh, Department of Aerospace Engineering, Seoul National University, NAEK Member
Speaker 1 (CAE)	Prof. Lixin Tang, Vice President of Northeastern University, CAE Member
Speaker 2 (EAJ)	Dr. Akira Yabe, Sustainable Energy Unit, Technology and Innovation Strategy Center (TSC), New Energy and Industrial Technology Development Organization (NEDO) Japan / Director, Field of Energy, Fukushima Institute for Research, Education and Innovation (F-REI)
Speaker 3 (NAEK)	Dr. Sanghyup Lee, Senior Researcher, Climate Environmental Research Institute, Korea Institute of Science and Technology

Session 3: Policy, Regulation, and International Collaboration for Future Industrial Systems

Moderator	Dr. Youngsoon Um, Principal Researcher, Clean Energy Research Center, Korea Institute of Science and Technology, NAEK Member
Speaker 1 (EAJ)	Prof. Yuko Harayama, Advisor and Distinguished Fellow, EAJ
Speaker 2 (NAEK)	Prof. Young Lim, Professor, Seoul National University AI Policy Initiative
Speaker 3 (CAE)	Prof. Fei Tao, Dean of International Institute for Interdisciplinary and Frontiers, Beihang University

※各セッションともに講演後に質疑・討議を実施。

Round Table Meeting(Closed Meeting) (15:30~16:55)

Greeting	(Moderator) Prof. Jae-Woo Park, Chair, International Relations Committee, NAEK
Academy Activities	NAEK: Prof. Jae-Woo Park, Chair, International Relations Committee CAE: Dr. Ning Ding, Deputy Director General EAJ: Prof. Nozomu Mishima, Chair, EA-RTM Executive Committee of EAJ
Joint Survey Result Presentation by NAEK	Prof. Joo-Young Park, Department of Civil and Environmental Engineering, Seoul National University, NAEK
Proposal on the 30th EA-RTM by CAE	Dr. Ning Ding, Deputy Director General, CAE

Technical Tour at LG Science Park (Magok) July 24th, 2026(10:00~11:40)

Group Showroom Tour	
Opening and Greeting	Dr. Byoungcheon Kim, Executive Vice President and CTO of LG Electronics, NAEK
Seminar and Q&A	Dr. Hyejung Jeon, Research Fellow, LG Electronics, NAEK

新入正会員のご紹介

(2026年8月入会者)

[第1分野]

ご けいりゅう
呉 景龍



岡山大学名誉教授、ヘルスシステム統合科学研究科 特命教授

1994年京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了、博士（工学）京都大学。立命館大学助手、山口大学講師、香川大学助教授、教授を経て、2008年より岡山大学大学院自然科学研究科教授、2018年より同大学ヘルスシステム統合科学研究科教授。2024年に同大学を定年退職後、現職。その間、JSPS、JST、JASSO、基盤研究、国際研究拠点形成などの代表を通して、主として脳機能計測、脳疾患の早期診断と臨床応用、プレーンマシンインタフェース、ニューロモデレーションの研究開発などを展開してきた。どうぞよろしくお願い申し上げます。

はなむら かつのり
花村 克悟



研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター 上席フェロー

富山大学工学部機械工学科を卒業し、東京工業大学（現、東京科学大学）大学院博士課程を中退後、同大学工学部助手。博士（工学、東京工業大学）取得。岐阜大学工学部助教授を経て、2003年から東京工業大学炭素循環エネルギー研究センター教授、改組により2016年より同大学工学院機械系教授。2024年定年退職。その1年前の2023年から現職。2015年よりJSTの「CREST」「さきがけ」複合領域「相界面」の後半4年間研究総括、2017年より「さきがけ」「熱制御」の研究総括。専門である熱工学を基礎としてエネルギーと環境に関わる研究開発の動向などを調査しています。

[第3分野]

ごとう まさひろ
後藤 真宏



物質・材料研究機構ナノアーキテクトニクス材料研究センター 主席研究員

名古屋大学大学院理学研究科にて、星間分子候補の多種金属ラジカルを新生成法にて見出し、そのマイクロ波分光研究にて、理学博士を取得。その後、分子科学研究所、新技術事業団、日本原子力研究所先端基礎研究センターの博士研究員を経て、2000年に金属材料研究所（現：物質・材料研究機構）に入所し、現在に至る。その間、多分野において、レイヤードクラスター、生体へのレーザー分子注入、液中分子ナノジェット、レーザー高分子ナノワイヤー創製、量子ドット含有超高感度光センサー素子、 $\text{Cu}_2\text{Se}_{0.87}\text{Si}_{0.01}\text{Fe}_{0.01}\text{O}_{0.16}$ 熱電材料、高性能スカイラジエータ、緻密ハイエントロピー断熱材料などの新材料創製・新手法開発を手掛ける。今後も、環境・エネルギー分野に寄与する材料開発に挑戦してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

たかむら ひとし
高村 仁



東北大学大学院工学研究科 教授、工学研究科長、総長補佐

1990年東北大学工学部卒業、同大学院工学研究科博士後期課程退学、東北大学・助手。1996年博士（工学）。JSPS海外特別研究員（米国MIT）、CREST研究代表者、東北大学テニュアトラック准教授などを経て、2011年東北大学大学院工学研究科教授。2026年より東北大学大学院工学研究科長。その間、SOFC/SOECや二次電池などエネルギー変換デバイスのためのイオン・混合導電体、また、光学薄膜等の機能性材料の開発や、固体NMRを用いた欠陥の局所構造解析に従事して参りました。これまで総長特別補佐・副理事として大学改革・評価にも従事しております。EAJの活動を通して、工学分野の教育・研究に関する知見を深め、微力ながらその発展に貢献できればと存じます。よろしくお願い申し上げます。

[第4分野]

ふくだ ひろあつ
福田 展淳



北九州市立大学国際環境工学部 教授

早稲田大学大学院理工学研究科を修了し、同大学理工学総合研究センターを経て、2000年より北九州市立大学に勤務、2007年より教授。建築環境設計、木質建築、建材リサイクル、低炭素都市・建築を専門とし、環境共生住宅や再資源化可能な住宅構法、CLT建築の設計・熱環境性能評価に取り組んできました。近年は、低炭素建築、高機能木材開発やロボットによる木造建築工法開発など産学連携を通じて研究成果の社会実装を進めています。EAJでは、建築・環境・材料・エネルギー分野の連携を深め、脱炭素社会に資する技術の社会実装と次世代人材の育成に貢献したいと考えております。よろしくお願いいたします。

ふたむら とおる
二村 亨



東海旅客鉄道株式会社 常務執行役員

1989年JR東海入社後、中央新幹線計画の推進に係る業務に長く携わってきました。2011年に中央新幹線の整備計画が決定され、その後、JR東海において環境影響調査手続きを進め、2014年に品川～名古屋間の工事实施計画が国土交通大臣により認可されました。その後は工事实施段階となり、大深度地下や山岳部における高土被りのトンネル、大都市部に設置する地下ターミナル、渓谷や大河川を跨ぐ橋りょう等の超高速で走行するリニアを支える土木工事の推進に従事しております。工事の安全、環境の保全、地域との連携を柱に土木工事の早期完成を目指して尽力してまいります。

[第5分野]

り ぎよくゆう
李 玉友



東北大学大学院工学研究科 教授

西安建築科技大学卒業（1982年）、天津大学大学院修士課程（1985年）修了後、東北大学に留学し1990年に工学学位を取得しました。東北大学助手、香港大学助手、東北大学助教授、アタカ工業主管研究員、東北大学准教授を経て、2013年から東北大学大学院工学研究科教授（環境科学研究科兼務）として教育・研究に従事しております。専門は環境保全工学であり、下水道システム、廃棄物処理技術システム、バイオマスエネルギーシステムなどの研究に取り組んでいます。近年はグリーンバイオテクノロジーの社会応用展開と資源循環の推進に注力しています。EAJを通じて異分野研究者との交流を深め、社会課題解決につながる新たな連携や知見創出に貢献したいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

[第6分野]

すずき もとふみ
鈴木 基史



京都大学大学院工学研究科 教授、研究科長、工学部長

1988年京都大学大学院工学研究科物理工学専攻修士課程を修了後、株式会社豊田中央研究所に入社、薄膜の物性と応用に関する研究に従事。1998年京都大学博士（工学）。2002年京都大学大学院工学研究科助教授、2004年同准教授、2013年同教授。2026年から工学研究科長・工学部長・京都大学副理事に就任。主な研究テーマは、薄膜のナノ形態制御による機能創成と応用、光熱変換によるマイクロバブル生成と流体制御。EAJには、統合知を有し継続的イノベーション創出を担う人材の育成に期待します。

[第7分野]

はた けんいちろう
畠 賢一郎



株式会社ジャパン・ティッシュエンジニアリング 相談役

広島大学歯学部卒業後、名古屋大学大学院医学研究科博士課程を修了。名古屋大学医学部および名城病院にて口腔外科医として診療・研究に従事した後、名古屋大学医学部附属病院遺伝子・再生医療センター助教授を経て、2004年に株式会社ジャパン・ティッシュエンジニアリング取締役に就任しました。以来、患者自身の細胞を用いた再生医療の産業化に取り組み、わが国初の再生医療製品である自家培養表皮、自家培養軟骨をはじめとする5製品の上市に携わってまいりました。今後も再生医療分野の発展に尽力してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

賛助会員

(2026年8月入会)

株式会社 大塚商会

終身会員

山田 淳
小堀 洋美

(2026年7月付)

(2026年8月付)

INFORMATION



大附 辰夫 会員
2025年2月28日逝去 84歳

1999年 EAJ入会
早稲田大学 名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。





有賀 一郎 会員
2026年1月8日逝去 95歳

1987年 EAJ入会
慶應義塾大学 名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



倉内 憲孝 会員
2026年3月26日逝去 93歳

1994年 EAJ入会
住友電気工業株式会社 元社長・会長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



小豆島 明 会員
2026年4月15日逝去 72歳

2007年 EAJ入会
横浜国立大学 名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



藤野 陽三 会員
2026年6月6日逝去 76歳

2010年 EAJ入会
城西大学 元学長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



寄附者ご芳名

(2026年4月～2026年9月の間にご寄附いただいた方)

匿名(会員)	一般寄附金	20万円
匿名(非会員)	一般寄附金	100万円
匿名(非会員)	一般寄附金	100万円
浜崎 祐司(非会員)	一般寄附金	非公表
中島 秀之(会員)	一般寄附金	5千円

ご寄附によるご支援に、心より感謝申し上げます。

公益社団法人日本工学アカデミーの財政基盤強化のために、寄附については是非ご協力をお願いいたします。
なお、公益社団法人への寄附行為が認められた寄附者は、税制面での優遇措置が受けられます。

▶ 2027年賀詞交歓会開催について

2027年1月14日(木)12:30～14:00に、2027年賀詞交歓会を開催いたします。会員の皆さまには、新春のひとときを共に過ごしていただければ幸いです。詳細につきましては、後日EAJホームページに掲載いたしますので、ぜひご予定くださいますようお願い申し上げます。

編集後記

EAJ会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

今年は例年より涼しい夏になるかと思っていましたが、9月に入ってから長雨が続き、全国各地で被害が発生しています。被災された皆さまにお見舞い申し上げますとともに、会員の皆さまのご無事をお祈りいたします。

私は今年度より広報委員長を拝命いたしました小田俊理です。これまで東京工業大学(現・東京科学大学)において、量子ドットデバイスの研究に取り組んできました。

今年6月から8月にかけては、オランダのデルフト工科大学に客員教授として滞在しました。スポンサーであるオランダ政府機関 Quantum Delta NL の支援のもと、量子コンピューター分野における日本とオランダの研究交流をさらに加速させることが私のミッションでした。

日本とオランダの交流は約400年前に始まり、江戸時代には出島を通じて継続されてきました。量子デバイス分野における研究交流も約25年前から続いています。量子コンピューター研究というと米国や中国が目立ちますが、ヨーロッパでも世界トップレベルの研究が数多く行われていることを実感しました。

特に印象的だったのは、ヨーロッパでは博士号取得後にスタートアップ企業に就職したり起業する若手研究者が多いことです。研究成果の社会実装を重視する文化の一端を垣間見ることができました。

日本の暑い夏を避けて涼しいオランダで過ごすつもりでしたが、今年のヨーロッパは熱波(Heat Wave)に見舞われ、思いのほか暑い日も少なくありませんでした。

広報委員長として、EAJ NEWSを通じて会員の皆さまに有益な情報をお届けできるよう努めてまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。(広報委員会 委員長 小田 俊理)